

この日も、特別なイベントもない平日に船内は満席。ここまで人々を惹きつけている理由は、何といっても「アートの島」としての取り組みと発信だ。

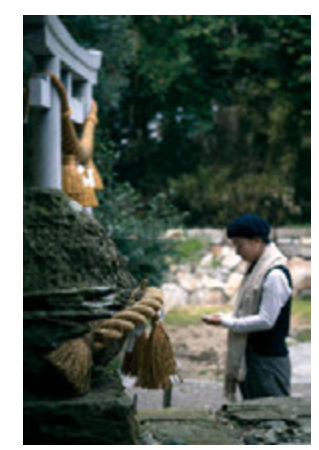
島内に点在する作品は現在22点。人気作品「おひるねハウス」のある浜辺は、万葉の頃から咲くハマダイコンの薄紫色の花が潮風に揺れながら作品と溶け合い、一つの風景を作っていた。アート作品を巡るうちに、島の自然や暮らし、歴史と出会う。また、四国八十八ヶ所になぞられた佐久島弘法の祠参詣の道とも重なり、アートをきっかけに、いくつ

もの発見の扉が開かれて行くことが佐久島の魅力だ。三河湾の景色の美しさを味わうなら、島の南東に位置する「筒島」がおすす。コンクリートの栈橋を渡ると「貝殻の浜」と呼ばれる砂浜が広がり、願いの叶う石の伝説が伝わる筒島弁財天には、「願い石」の奉納もできる。

佐久島に訪れたらぜひ食べたいのは、三河湾名物の大アサリ丼。島の新鮮な海の幸や野菜の料理を提供する「ごはん屋 海」では、女主人が調理する大アサリが肉厚でとても美味しい。



ごはん屋 海
愛知県西尾市一色町佐久島東屋敷41、電話0563-79-1910。営業時間は11時～15時、火曜定休+不定休。古民家を改装した建物で三河湾で水揚げされた旬の海の幸や季節の野菜料理が味わえる。



● 弁財天



● 筒島

佐久島へのアクセス
西尾市一色漁港(愛知県西尾市一色町小藪船江東169、電話：0563-72-8284)から毎日7便運行。渡船料金(片道)は、大人(中学生以上)820円、子ども(小学生)410円。



ワンデイ・トリップ

佐久島 素敵なふしぎに 出会える旅

穏やかな三河湾の中央に浮かぶ佐久島。“インスタ映え”のする観光スポットとして、若い人を中心に多くの来島者で賑わっている。今回は、そんな佐久島を大人の女性の目線で巡ってみた。
(ライター・荒木正美)

現代アートが結ぶ いくつもの島の景色

佐久島へは、西尾市一色漁港から市営渡船に乗り、20分程で到着する。島の歴史は古く、縄文時代から人が住み、江戸時代には海を生活の

場とした海部族の末裔たちにより、海運業で繁栄した。人口約230人、豊かな大自然も多く残され、海と森、昔ながらの集落が島の風景を織り成している。
近年、この島に年間10万人を超える観光客が訪れている。私が訪れた





小道の途中で待つ 出会い・触れ合い

路地からふと見えた道沿いの、ある家に咲く季節の花々が見事だったので、庭にいた女性に思わず声をかけた。「あなたが話しかけてくれたから」。女性がそう言って笑顔で私を迎え入れ、案内してくれたのは、敷地内に建つ古く重厚な蔵だった。開かれた扉の向こうにあったのは、部屋いっばいに展示された工芸品のような灯りのオブジェ。続いて導かれた隣の部屋には、江戸から明治のものと思われる多数の古道具が資料館のように所蔵されている。

この家に住む三宅さんは13年前、ご主人の退職をきっかけに愛知県海部郡からこの島の魅力に心を奪われ移住した。灯りのオブジェは、三宅さんが海岸で拾ったシーグラスや貝殻を利用して作ったもの。古道具の方は、約300年続く庄屋だったこの家を購入した際、三宅さんが受け



「歩く愉しみ」味わう 黒壁集落と古墳群

島内に公共交通機関はなく、島巡りは自ずと「歩く」旅となる。島の周囲は約11キロあるが、島中を歩いても1日あれば隅々まで散策でき、忘れかけていた「歩く愉しみ」を思い出し、うれしくなる。散策の拠点であり、島の情報を提供してくれる休憩所「弁天サロン」は、島のひとの触れ合いの場としてもぜひ立ち寄りたい。島の集落は西と東のエリアに分かれている。西側の港にある「弁天サロ

ン」を過ぎ、左に向かうと「三河湾の黒真珠」と称される黒壁集落が並ぶ。黒壁は潮風から建物を守るためにかつてコルタルを塗ったもので、独特の景観はいつまでも心に残る。島歩きをしながら驚かされるのは、点在する古墳の多さだ。これまで45基程が確認され、いずれも6〜7世紀のものだという。塚には、はるか昔にこの島で暮らし、島の生活を愛した古の人々の心が宿っているようだ。島歩きに疲れたら、古民家を改装した「サカカフェ aohana」でひと休み。2年ほど前に名古屋から移住

●山の神塚古墳



サカカフェ aohana

愛知県西尾市一色町佐久島前田45、電話080-4277-5543。営業時間は9時〜18時(不定休)。様々な味が楽しめる高級ふわふわかき氷が名物の古民家カフェ。オーナーが手作りする貝殻のアクセサリも充実。おすすめは、林檎と梨のアールグレイ(900円)、金魚鉢風かき氷 プルーハワイ&レモン(1200円)。



「物」が放つ存在感。旅の醍醐味は、